

## 5. 運命の再構築から学ぶ庶民のジェンダーとライフコース

黒須 里美 (麗澤大学教授)

皆さん、今日は。ただいまご紹介にあずかりました、黒須と申します。本日はお忙しい中たくさんご来場いただきありがとうございます。速水先生が長年収集された膨大な量の歴史人口学関係資料が麗澤大学に寄贈され、ミクロ・マクロそれぞれの資料が、本年8月、一斉に麗澤大学図書館に移りました。その整理からはじまり、経済社会総合研究センターや麗澤大学図書館、そして歴史人口学関係の様々な皆様のご協力を得て、このようなシンポジウムと展示までこぎつけることができました。まずこの場をかりて御礼申し上げたいと思います。

さて、私と速水先生との出会いは1990年にさかのぼります。国際日本文化研究センターの助手採用面接試験で、妙に印象に残った面接員のおひとりが、速水融先生でした。その後、アメリカからもどり、国際日本文化研究センターの助手になり、現代の人口と、現代の家族や生き方がどう規定されているかに興味をもって研究していました。ところが、現代人口、家族を研究する資料というものは、なかなか手に入らないのです。そうこうしているときに、国際日本文化研究センターにいらした教授の速水融先生に声をかけられまして、「このような史料があるぞ」ということで、最初に明治の統計を紹介されました。

1906年の丙午は明治の丙午で有名ですけれども、その前の1846年の丙午(ひのえうま)はどうだったのか、だれも見えていません。そこをちょっとやってみたらどうかというので、そのような甘い声をかけられたのがきっかけで、弘化3年丙午の研究をしました。ものすごい地域差があるというのが分かりました。とても面白くなってしまいました。

そうこうしているうちに、速水先生がまたおいでになりまして、「今度は、このような史料があるよ。ちょっとやってみないか」と言われました。これはどのような史料かと言いますと、今日おいでの安澤秀一先生が、その地域について随分ご研究されている、「1870年、明治3年多摩戸籍」というものです。これは、戸籍制度がはじまった、そして現在は利用できない「壬申戸籍」の前に試験的に作成されたものです。

単年のデータではありますが、35か村分もあり、戊辰(ぼしん)戦争で亡くなってしまいました土方歳三の生家がある石田村も含まれています。何だか面白くなってしまい、だんだん足が洗えなくなってしまいました。現代人口をやっていたにもかかわらず、研究のほうは、どんどんどん歴史をさかのぼっていきました。そしていつのまにか、先ほど話のでました18~19世紀の人別改帳をデジタル化したザビエルデータにつかまってしまいました。

これが、今日のタイトルである、ライフコースにつながります。「ライフコース」とは、先ほど、「人生いろいろ」と浜野先生の報告にありました通りです。この意味を理解するために手っ取り早い方法があり、授業でよく使います。まず、「自分が生まれたときからこれまでを、一本の線にしてみなさい」と学生にいます。まず、自分の線です。「何年に生ま

れて……」と、1本書きますね。「では、そこにお父さんの線も付けてみよう」と書かせます。「お母さんの線も付けてみよう」と書かせます。こうしていくと世帯ができて、家族ができていくわけです。1本だったラインが幾つか増えることによって、家族相互の関係がみえてきます。

それが、さらにたくさん増えていくと、「人生いろいろ」がみえてきます。個人の人生から自分の選択で歩んでいる人生——自分で結婚を決める、自分で離婚を決める、自分でどこへ行くかを決めるはずですね。ところが、ひとりひとりのライフコースのラインを集めていくと、「人生いろいろ」がパターンになって浮かび上がってくるのです。それがまさにライフコース研究の面白いところで、足が洗えなくなってしまいました。そしていつの間にか麗澤大学で、このような貴重なデータを預かる羽目になってしまいました。

というわけで、今日のこの「運命の再構築から学ぶ庶民のジェンダーとライフコース」になるわけですが、このタイトル、全く分からないタイトルですね。最後にこれが分かるようになっていただきたいのですけれども、時間が限られているので、最初に今日のお話のポイントを言います。

運命、まさに人生いろいろ。わたしたちは、いろいろな運命を持っています。それを、やはり現代の社会学者も何とか引き出したい、それでアンケート調査やインタビューをします。そのようなものを集めると、わたしたちの人生、自分で決めていると思っていることが、実はどのような文化規範であったり、社会経済状況であったり、どの国にどう住んでいるかによって決定されているということがみえてきます。

それを、まさに徳川の時代まで引き伸ばしてみようというのが今日のお話です。「現代だけやっても見方が偏ってしまうのではないか」、「現代を知るには、やはり過去を知らないといけないのではないか」、というような気持ちで、長期的な視野を持って見ると、たくさんの方が分かります。宗門改帳や人別改帳という庶民、民衆、つまり歴史の教科書にも出てこない人たちの貴重な記録を調査対象とすると、実に、たくさんの方が分かるのです。

その中から、今日は、皆さんに、多分一番身近な「結婚と家族」に焦点を当てたいと思います。「結婚と家族」に焦点を当てることによって、私たちのライフコースが、例えば女であること、男であること、あるいは家族の中で最初に生まれたこと、つまり長男・長女であること、あるいは次・三女であること、次・三男であること、それらが自分の「人生いろいろ」の決定にどうかかわってくるかということが分かってきます。

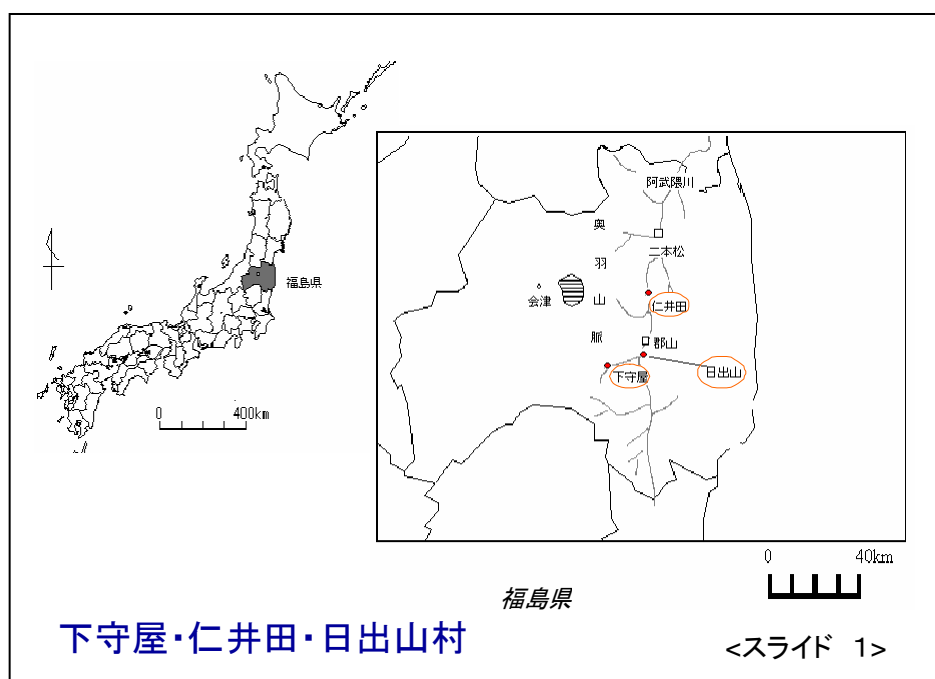
そして、その「人生いろいろ」のパターンを見出して、さらに5か国と比較しています。日本、イタリア、ベルギー、スウェーデン、それから中国の清朝の5か国の比較研究です。これを合わせると、これから紹介する1農村の1農民、キヤさんという女性がいますが、このキヤさんが、例えばイタリアのイザベラと出会ってしまうのです。「出会ってしまう」というのは変ですけども、もしキヤさんがイタリアに生まれていたらどうなるのかということ、ちょっと歴史的な仮定にすぎないのですけれども、そのようなことまで考えら

れる。どのような状況が、どのような人生いろいろを生み出すのか、これが分かるのではないかというようなことが、今日のポイントです。

さて、いよいよ徳川農村の話に入ります。今日スポットを当てるのは、先ほど高橋先生からお話のあった、郡山の近くにありますが仁井田村・下守屋村という農村です[スライド1]。そしてもう一つ、何年か一緒に研究をしている人は分かってくれると思うのですが、日出山もついに追加しました。仁井田・下守屋は、今や国際学会で有名になりまして、「ニイタ、シモモリヤ」という感じで、英語的発音で呼ばれています。世界的に有名になっております。2006年の11月にミネアポリスであった学会で日出山も紹介しまして、これから日出山も有名になってくると思います。

それはともかく、仁井田・下守屋はのどかな農村地帯です[スライド2]。日出山というのは郡山から3キロしか離れていないので、どちらかという経済市場にも巻き込まれているという、そのような違いがあるということを覚えていてください。

さて、この三つの村で、なんと150年から162年間、史料が続いています。途中で史料が抜けている年はあまりありません。ですから、これを見るだけで、「人生いろいろ」に興味を持ったら、4世代も5世代も追えるというわけです。現在はのどかな農村風景ですが、史料の語る場所は、いったいどんな状況でしょうか。まず人口を見ていただきたいのですが、人口は史料の開始からどんどん減少しています[スライド3]。



**史料(二本松藩・人別改帳)**

下守屋村 1716-1869年(154年間、欠年9年)

仁井田村 1720-1870年 (151年間、欠年4年)

日出山村 1708-1870年 (162 年間、欠年36年)

村	人・年		
	男性	女性	合計
下守屋	3,641	4,188	7,829
仁井田	5,991	5,178	11,169
日出山	4,392	4,036	8,428
3ヵ村	14,024	13,402	27,426



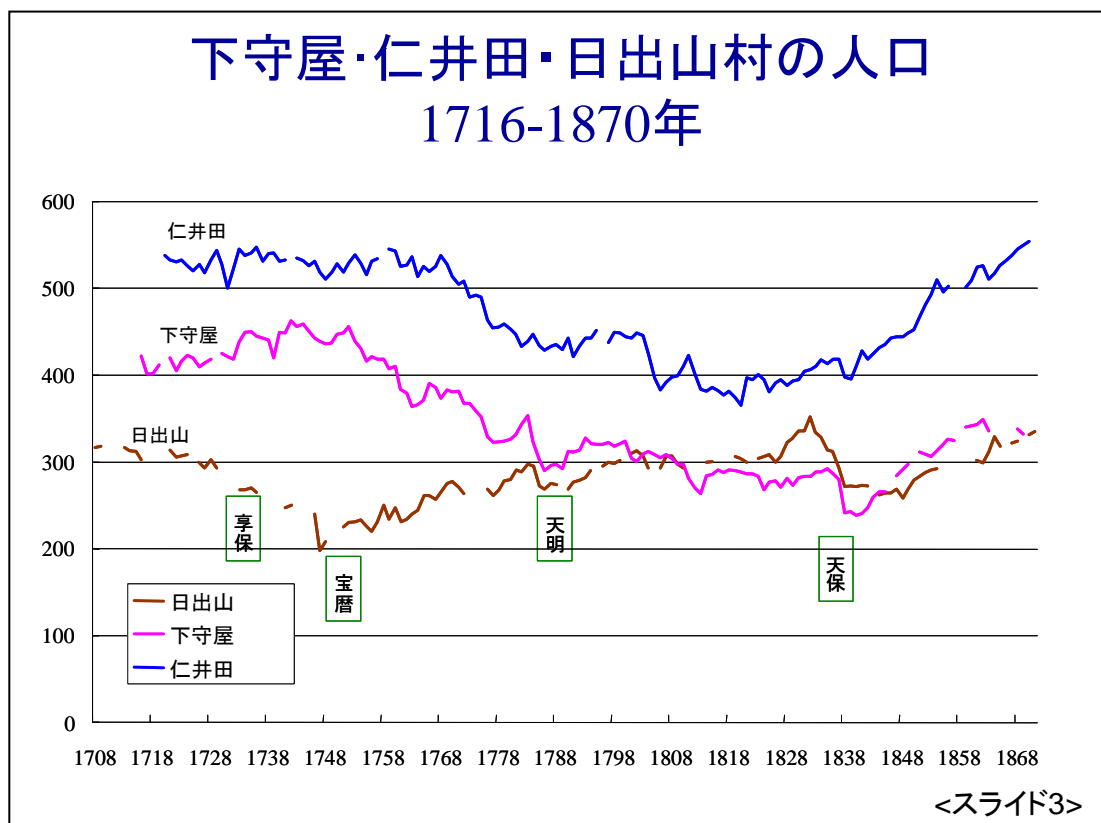
現在の下守屋

資料と分析対象

<スライド 2>

徳川の時代の大飢饉というのは、皆さん、ご存じだと思いますけれども、この村々は大凶作に見舞われ、自然災害にも見舞われ、農民たちは高い年貢にも見舞われ、非常に苦しい生活を送っていました。つまり農民の苦悩の歴史が、この人口のライフコースの束を見るだけで分かるような気がします。人口 500 人以上いたところが、天明の飢饉（ききん）を経て、回復できずにずっと下がって行って、やっと天保の飢饉を過ぎて、人口がまた増えだすというような具合です。

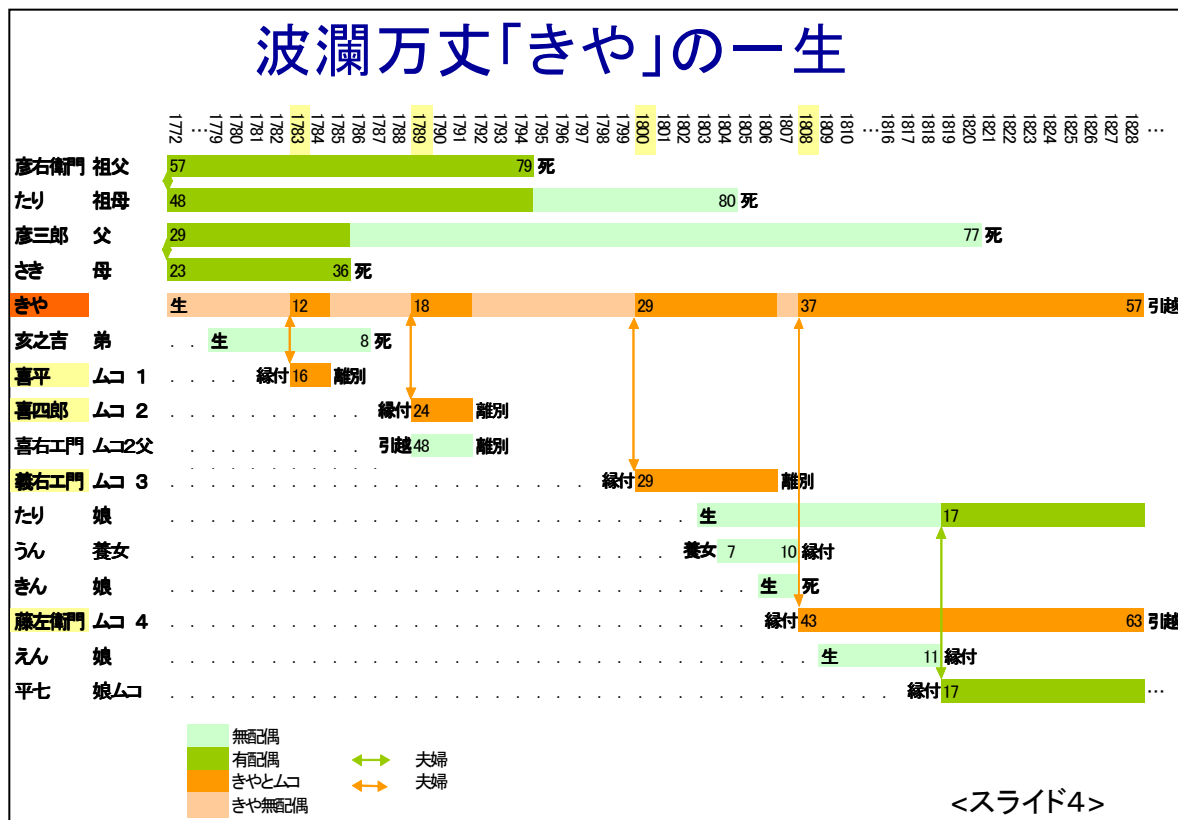
天保の飢饉までこのように人口が下がってしまいます。もともと出生率の高くないところですから。たび重なる飢饉、不作。疫病の蔓延で死亡率が非常に高くなる。あるいは「座して死を待たず」、郡山など近くに逃げ場を求めて、移動する。自然増加も社会増加もマイナスになったというのが人口減少の背景です。



さて、このような場所に生きたある女性、キヤさんの一生を紹介します[スライド4]。これを見るだけでも、先ほど「ライフコースを1本描いて2本めを描いて、3本以上描いていくと、いろいろなことが分かる」と言いましたが、まさに史料が、「波乱万丈キヤの一生」を語ってくれます。

このキヤさんという女性は、この長い一生を生きていくのですけれども、まず、生まれたときは、彦右衛門、タリさんというおじいちゃん、おばあちゃんがいます。そして彦三郎、サキさんというところに生まれた長女です。その長女が、ずっとこれから生きていくわけですが、この1ラインを一つの一生だと見ていくと、ラインが重なっているところが一緒に住んでいると思ってください。ですから、これで3世代一緒に住んでいるのだというのが分かります。

そこに弟の亥之吉さんが生まれてくるのですけれども、8歳で死んでしまいます。時、あたかも天明の飢饉です。天明の飢饉、ここはキヤの生家にとって、非常に苦しい時代だったのではないのかなと分かりますね。まずは、お母さんが36歳で亡くなってしまいます。キヤさんは、その前にまず結婚しているのですけれども、そうこうしているうちに亥之吉さんが亡くなります。この弟が亡くなったおかげで、多分、キヤは一生この家を守っていく立場になるというような感じがします。



さて、ここでちょっと婿たちに着目していただきたいと思います。「米ぬか三合あれば婿に行くな」などということわざがあります。婿はやはり大変なのでしょうね。婿に行くというのは、世帯側、家族からすると、「娘しかいないから婿を取って、その家を継がせよう」という魂胆があるわけです。そうしますと、世帯側からの研究をすると、「婿さんというのは、その家を継ぐのだ」ということになって、「婿養子というのは、ちゃんと戸主になっていくのだな」と思いますね。

ところが、いろいろな婿がいるわけです。まず最初の婿、喜平さんが入るのですが、2年と続かずに離縁されて帰っていきます。そしてしばらくするうちに、お母さんが死に、弟が死にしているうちに、キヤさん18歳で2度めの結婚をしまして、今度は喜四郎さんという2番めの婿が来ます。同じ村から来ているのですけれども、この人は何を思ったか、お父さんと一緒にやってきます。お父さんと一緒に、縁づいて来るわけです。お父さんは喜右衛門さん。今だったら、とても考えられないのですけれども、案の定、やはりうまくいかなかったようです。これは、うまくいかなかったのが、こちらのせいなのか、あちらのせいなのか分からないのですけれども、とにかく、ここで離別されて、彼らはまた元の家に戻っていきます。

そして、ここの色を薄くしてあるところですが、キヤさんはしばらくまた独り身に戻ります。ひとりで頑張って家を継いでいます。そうこうしているうちに、おじいちゃんも亡くなりまして、おばあちゃんは、その後の数年間を寡婦として過ごすことになるわけです。でも、お父さんはまだ生きています。

そうこうしているうちに1800年、29歳になったキヤさんは、義右衛門さんという、同じ年の人とまた結婚します。3度めの結婚です。3人めの婿です。さて、「もう続いてもいいだろう」と思いますでしょうか？これを見ますと、長くはなりませんでしたね。この家の何が問題なのか、婿の何が問題なのかは分かりませんが、ここで結婚3年めにして、やっとタリちゃんという娘が生まれます。時を同じくしてタリおばあちゃんが亡くなったもので、タリさんという名前がついたのかもしれませんが、タリちゃんが、長女として生まれます。ちょっと先に言ってしまいますと、このタリちゃんが永らくこの家を継いでいきます。

そこに養女も取ったりします。養女を取るのですが、この養女は10歳で結婚していきます。その次に、もう1人娘がいますが、生まれてすぐ死んでしまいます。先ほどの亥吉さんと同じですけれども、やはり乳児死亡率が高く、非常に厳しい状況だったことが分かります。

そうこうしているうちにキヤさんは4度め、つまり長女が生まれたのですけれども、この3人めの婿さんは追い出されたのか、逃げ出したのか、いなくなります。いなくなったというか、元の家に戻るのです。この人は元の家に戻って、そちらの史料を見ると分かるのですけれども、しっかりとその元の家を継ぐというような形になっています。それで、4人めの夫が来ます。この藤左衛門さん、43歳。キヤさんは、もう37歳。現代の日本では、だんだん年齢が上がると再婚の確率、再婚のチャンスというのは下がりますね。この

時代も同じなのですが、まあ大体 35 歳ぐらいがひとつの境で、35 歳ぐらいまでだったかなりの割合で再婚が起こるといようなことが、研究で分かっています。

やっと 4 人めの、この藤左衛門さんと一緒に、キヤさんは永らく一生を終えていくわけです。ここには出しませんけれども、「波乱万丈キヤの一生」の最後は、この後に、キヤさんが藤左衛門さんとともに、彼の出身世帯に戻ります。タリちゃんは婿養子と縁づいて、この家を守り、この家は 1870 年のこの史料の最後まで、永らく続きます。しかし、このキヤさんと 4 人めの婿、藤左衛門さんは、それを見て安心したのか、藤左衛門さんの家が危ないと思ったのか、そちらの世帯に引っ越ししまして、そこで生き永らえるわけです。

ところが、時、天保の飢饉です。最初に、6 月に藤左衛門さんが亡くなり、2 か月後にキヤさんは、それを追うかのごとくに死んでいくといような、「波乱万丈キヤの一生」。これだけでも、人生いろいろがたくさん分かっていただけたと思います。一農民とその家族をめぐる小説を読んだような面白さがあります。

この波乱万丈のキヤさん、ここで見てお分かりのように非常に若くして結婚していますね。キヤさん、12 歳で最初の結婚、タリちゃんは 10 歳で結婚、エンちゃんは 3 番めの娘ですけれども、11 歳で縁づき、ものすごく若いです。しかし、これが、この家の特徴なのか。確かにキヤさんは、この村で結婚回数が一番多い人なのですけれども、そのキヤさんや彼女をめぐる人々の体験がその当時の代表的なものだったのかどうかは、ここからはわかりません。しかし、これらのライフコース、農民たちの「人生いろいろ」の束をたくさん合わせて見ると、パターンが分かってきます。次に、その紹介をしたいと思います。

簡単に言って、やはり東北の農村の結婚適齢期というのがあったようで、日本のどの地域よりも早かったようです。この 3 か村を見ると、男性の場合、18 歳には、もうみんな結婚しています。18 歳は、これらの村の男性の平均初婚年齢です[スライド 5]。女性は「15 でねえやは嫁に行き」といような子守歌がありますけれども、まさにその時代ですね。

もう一つ面白いのは、これらの農村が「皆婚社会」だということです。だれもが結婚するというのが、この数字で分かります[スライド 5]。特に下守屋・仁井田村では、女性はもう 30 歳を過ぎたら、ほぼ全員が結婚しているといような社会です。考えてみると、この結婚年代はだんだん遅れていきますけれども、皆が結婚するという意味では、この状態は、現代の日本にまで続いていますね。そのようなことが分かってきます。

一言付け加えると、日出山はだいぶパターンが違います。でも、これはやはり経済市場に参入していく村だといことで違うのだなといお話は、また別の機会にしたいと思います。



## 東北農村の結婚適齢期?! だれもがする結婚?!

初婚年齢 (SMAM)	男性	女性	%未婚 (45-49歳)	男性	女性
3カ村	18.4	15.2	3カ村	6.9	1.8
下守屋	18.1	14.3	下守屋	3.2	0.3
仁井田	18.2	13.1	仁井田	5.2	0.8
日出山	19.1	16.6	日出山	14.8	5.6

<スライド5>

しかし、キヤの時代というのは、だれもが結婚する「皆婚社会」であったのですけれども、だれもがそこまで生存できるとは限らない社会でした。1歳から4歳までの平均余命は42年、死亡率というのは現代の発展途上国の高さ、そして4割は、結婚しないまま30歳以前に死亡してしまいます。ただし、キヤさんのおじいちゃん・おばあちゃん・お父さんのように、長く生き永らえている人もたくさんいるわけです。

というわけで、この時代というのは、特にこの時代のこの農村というのは、まずは生存が先決です。ところが自分の生存も大事なわけけれども、世帯は、先ほど浜野報告にありました直系家族です。まさに、だれかしらに家を継がせたい。キヤの家族もだれかしらに家を継がせたいと婿を取ってきました。その戦略が世帯にはあるわけです。ですから世帯にとっては、跡継ぎと労働力の確保も、農業を営んでいくためには重要だということです。

そう考えますと、今日のテーマである結婚。人がいつ結婚するか、だれと結婚するかというのは、非常に重要な意味を持ててきます。つまり、結婚というのは愛しあって結ばれるというだけではなく、個人のサバイバル、それから世帯共同体の継続と労働力にとって重要になってくるわけです。だれが入ってくるか、いい婿が来るか、いい嫁が来るかによって、その家の一生が決まると思っているのでしょうか。

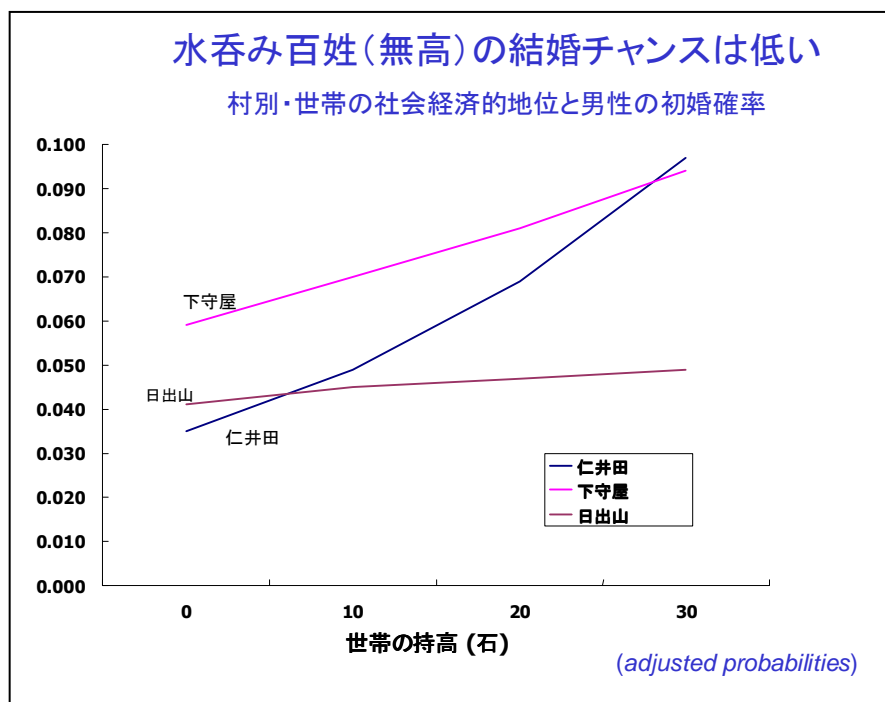
そのような意味で、だれが残るか、だれが出るのか、出るか入るか、そして今、「婿取り婚」というのを随分言っていますけれども、嫁が来るのか、あるいは婿を取るのかで、世帯のサバイバル戦略が決まっていたのではないかと、というように考えられます。

結婚のチャンス、だれが結婚するのか、どのようなタイミングで結婚するのかというのは、先ほど申しましたように、実は、それは、その個人が、男か女か、長女か長男か、あるいは二、三男か、どのような世帯——つまり経済階層の高い世帯にいたのか、それとも水呑にいたのか、あるいは、どのような社会経済状況——豊作だったのか大凶作の時代だ

ったのか、それによって結婚のチャンスが非常に変わってきます。

この状況を示すグラフをお見せしたいと思います[スライド 6]。この3か村を比べてみたのですけれども、ここで注目していただきたいのは仁井田村、この線です。これは統計的な操作をしまして、例えばその住んでいる村の経済状況、それから、その個人がどのような人と住んでいるか、個人が何歳かというような、いろいろな重要な要件をすべてコントロールする。つまり、それらが同じだとすると、どのような持高の——富裕層か貧困か——家に生まれることが、その個人の結婚の確率、結婚のチャンスに、どのような影響を与えるかというグラフです。

これを見ますと、水呑、つまり無高の家に生まれた人の結婚確率は、30石グループの3分の1です。つまり、一番上の層30石という——この村の平均は大体12石ぐらいなのですけれども——村役人レベルの世帯に生まれた人の3分の1です。逆に言いますと、村役人レベルの世帯、富裕層に生まれた人は、無高の人よりも3倍も結婚のチャンスがあった、早く結婚したということが分かります。

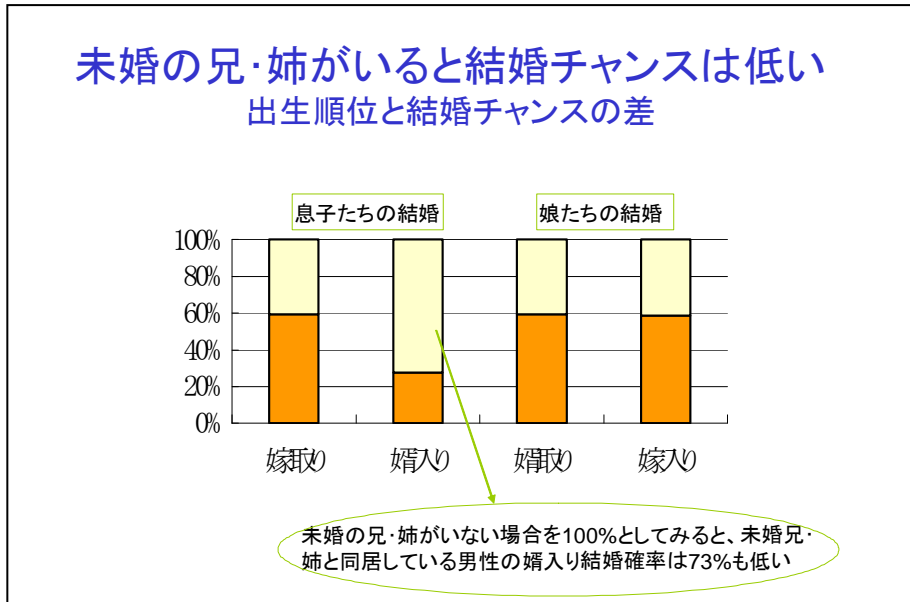


<スライド 6>

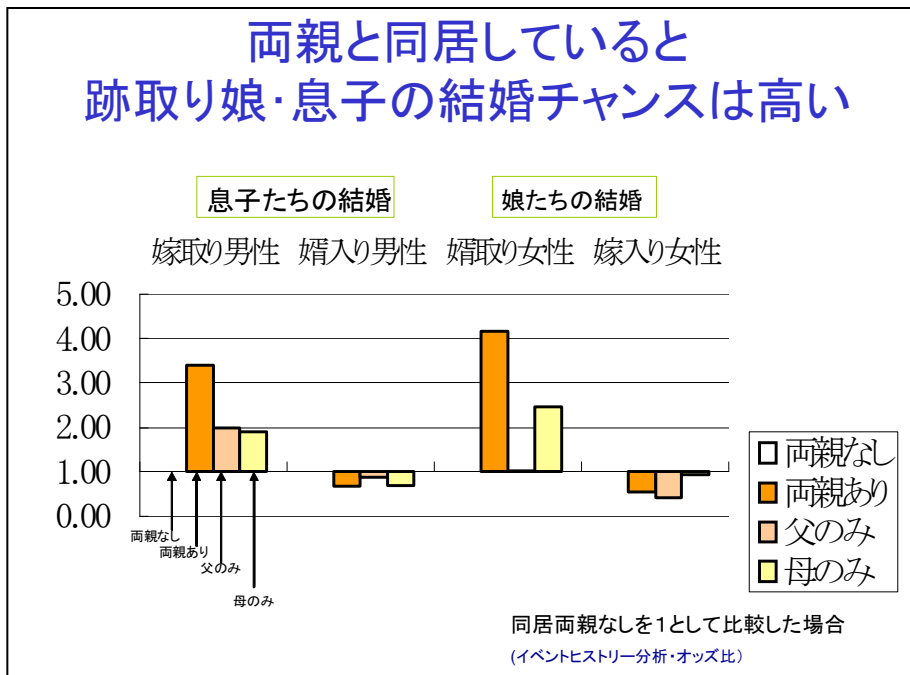
もっといろいろ分かります。やはり未婚のお兄さんとかお姉さんがいると、結婚のチャンスは低いです[スライド 7]。お兄さんとかお姉さんがいない場合を100%と見ると、例えば未婚のお兄さんやお姉さんがいた場合は、73%も結婚の確率が低くなります。つまり、現代と全く一緒です。まず、わたしの姉が結婚しました。その後、わたしも結婚しました。妹が姉の先に行くことは、現代でも少しはばかられます。これは、まさに現代と同じこと

が、この農村でも分かります。

もっと分かります。跡取り息子とか跡取り娘というのは、こう見ますと、どうやら親と同居していたほうが結婚のチャンスがあります[スライド8]。つまり、親がいたほうが婿を取る、嫁を取るというような結婚をするというの分かります。



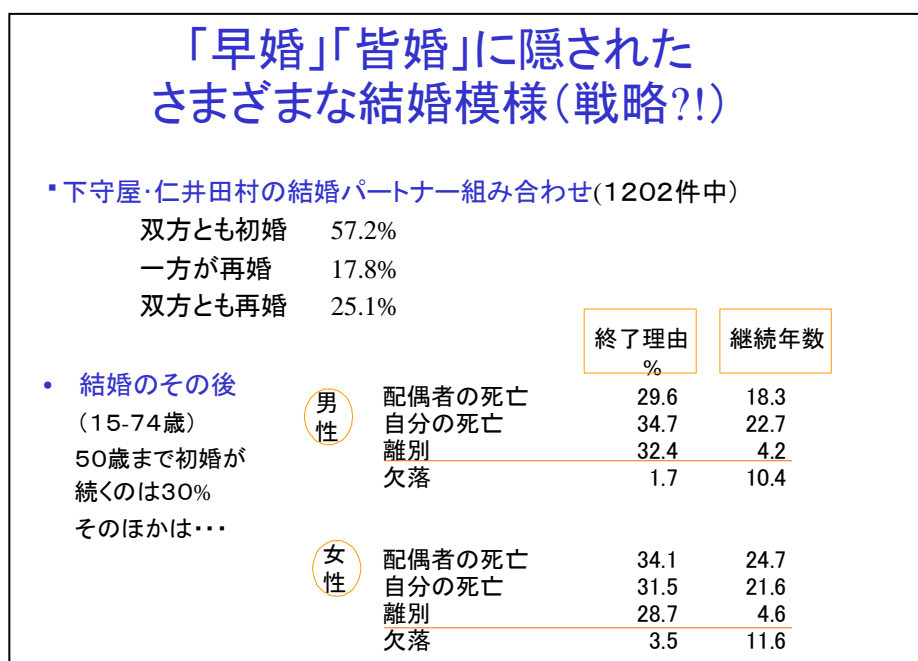
<スライド 7>



<スライド 8>

さて、もう一つ、この時代の結婚を理解するために大切なことがあります。とても早い結婚、だれもが結婚する社会という話をしているのですが、実は、それというのは高度経済成長期日本でもそうです。みんな結婚します。だけれども、この時代の結婚には、さまざまな結婚模様が隠ぺいされていた、隠されていたということです。

村内で起こったすべての結婚を見ますと、両方初婚だというのが57%、一方が再婚だというのが18%、すべての結婚で両方再婚が25%なのです[スライド9]。先ほど離婚が多いという話をしましたが、それぐらい再婚も多いです。今は時間がないのではしよりますが、離婚、離別は非常に多いです。つまり、自分が死ぬか相手が死ぬかというような形で結婚が終わることはとても多いのですけれども、それと同じくらいに、離婚によって結婚が終了していたのが多いというのが、この村です。



<スライド9>

その離婚についてみますと、大体、嫁が追い出し離婚というイメージがありませんか？ 追い出されるのは嫁だろうと。そうでもないです。追い出されるのは婿も一緒です[スライド10]。婿も嫁も追い出されます。でも、つらくて逃げ出しのかもしれませんが。そのようなことで、キヤさんの婿たちを思い出していただければ分かると思います。

このような状況を見ていきますと、随分イメージが変わります。女性だけが追い出されていたのではなくて、男性でもこのような思いをして、世帯の継続、サバイバルのために、個人のライフコースが影響されていたのだというのが分かります。

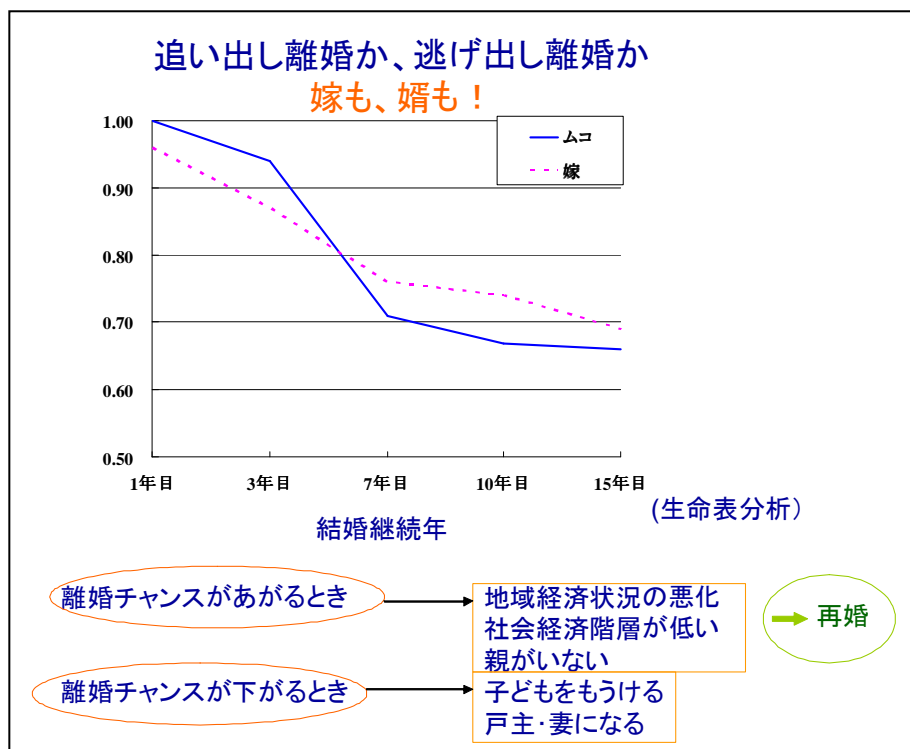
というわけで、経済状況が悪化したりとか、社会階層が低かったりとか、親がいないと

きに、かなり離婚のリスクが上がります。婿取り婚は離婚率が高いです。これらは、現代日本の離婚の状況にも共通することです。

逆に離婚確率が下がる時は、子供ができた場合。うまずめだから女性が追い出されるというイメージがありませんか？でも、そのようなことはないのです。結婚後、かなり早くに離婚が起こるので、子供を産める人なのか産めない人なのか分からないうちに、離婚が起こります。よくよく見てみると、次の再婚でちゃんと子供を産んでいる人も、何人もいます。というわけで、子供を産めるかどうかが離婚の直接的原因になっているのではないのです。しかし、確かに子供がいると、離婚のリスクは下がるということは分かりました。

もう一つ、やはり戸主、あるいはその戸主の女房になると、かなり離婚のチャンスは下がります。一度、自分がその世帯の重要人物になると、もう離婚は起こらないのだなということが分かります。

そして、今日は残念ながらお話できませんが、再婚についても同じように統計を使って研究していきますと、たくさん再婚が起こっていたことがわかります。ただ、たくさん再婚があるだけではなくて、その中でもいろいろな法則が分かっています。そして、今、これは、先ほど言いました5か国との比較研究をしている最中です。

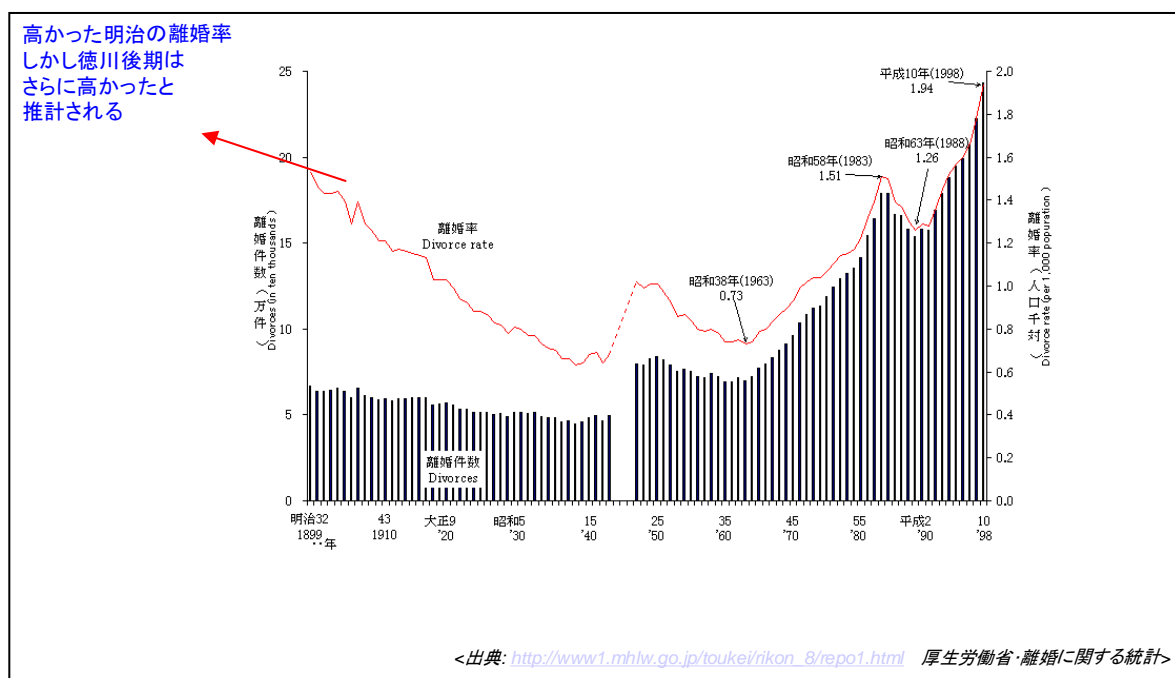


<スライド 10>

最後にスライド 11 の離婚率の変化をご覧ください。現在、先ほど言いましたとおり、非婚、未婚が進み、かつ離婚がこのような増えています[スライド 11]。最近だけを見てみますと、離婚が非常に増えて今の日本の家族は危機的ではないか、と勝手に思ってしまう。もう少しさかのぼってみましょう。家族社会学者は、やはりデータがあるところですから戦後に注目します。戦後だけを見ると、やはり離婚が増えて、「日本の家族は崩壊に向かっていっているのではないか」と不安になってしまうのです。

ところが、明治までさかのぼると、かなり離婚率は高かったのです。明治民法になって離婚率が低くなったというのが分かるのですが、その前は——今日はお見せできませんけれども——あのキヤさんたちの経験を束ねて、統計計算をしていくと、明治よりもっと高い徳川の離婚率というのが分かります。

やはり現代の社会科学の研究というのは、その資料があるところに限られます。あるいは時間軸も、戦前・戦後という見方に縛られます。そして理論的にも近代家族と言ってしまうと、やはり日本だと、せいぜい戦前の家族という話になりますので、非常に家族に対する見方が近視的になります。そうすると、近視的に見えたところで「家族が危ない、家族はだめだ、もう日本はだめだ」となってしまいますけれども、もう少し広げて長期的に見ていくと、かなり違った見方ができるのではないのでしょうか。



家族をめぐる現代の社会科学的研究の制約?! <スライド 11>

というわけで、今日のタイトルの「運命の再構築から何が学べるか」というものの例が、少し分かっていただけたらうれしいです[スライド 12]。やはり長期的視野で見ることは現代の家族を、生き方を考えるうえで重要です。かつ名もない庶民の記録から運命を再構築することによって、たくさんの家族や生き方があったことを学ぶことができます。

## 運命の再構築から学ぶ～

- 長期的視野の必要性
- ボトムアップの視点の重要性：名もない「庶民」の記録からとらえなおす
- 国際比較：中国（東北部遼寧省）、イタリア（北部）、ベルギー（ワロン語地域）、スウェーデン（南スカニア半島）



- 家族は「昔」からの単純な連続か？  
*No!* 時代と様々な自然環境・社会的条件の中でフレキシブルにそのすがたを変えてきた家族
- 現在の家族は「多様」か？  
*No!* 不確定要素が少ない、予測可能 ∴ 規範遂行可
- 私たちの挑む「未来の家族」は？  
*Yes!* 歴史上、はじめてサバイバルからも、因習的規範からも解放された多様な家族のすがた

<スライド 12>

このようなアプローチを国際比較で、中国の遼寧省、イタリアのトスカーナ地方——あのワインやいろいろ、お肉などがおいしいところ、ベルギーのワロン地方、それからスウェーデンの南のほうのスカニア地方の研究者たちと、ここ 10 年間研究をしております、やっとその成果がまとまりました。死亡についての研究ですけれども、死亡というのはだれでも経験しますね。それが、だれでも経験する生物学的なことのようにでありながら、実はそうではなくて、どのような家族と住んでいるか、どのような経済状況かなど、かなり社会的な、経済的な、かつ文化的な規定要因によって変わってくるのだということが分かってきました。その成果が、MIT Press（マサチューセッツ工科大学）から出まして、一昨年、アメリカの社会学会で賞をもらいました。そのような研究が、今、国際的に認められています。

最後になりますが、やはり、わたしたちは家族を見るうえでは、昔からの単純な連続ではありません。家族は時代とさまざまな自然環境、社会の中で本当に柔軟に対応しているわけです、変容しているわけです。そして、その中で共通性、連続性もあるのだと思います。

これからの未来の家族を考えるうえで、今、わたしたちが目指しているのは、キヤさんの生きたような、そのサバイバルを重視しなけりばならなかつたような環境からも、また因習的規範からも、解き放たれた本当に多様な家族であるということを目覚める必要があるのではないでしようか。過去から見ることによつて、そのような歴史の流れの中に家族を位置付け、今後の可能性を考えることができるのではないか、というところで、今日は終わりたいと思います。どうもありがとうございます。